









## 文学碑記念公園

1885年(明治18)11月12日、作家島尾敏雄は忽然として55年の生涯を閉じた。

その突然の死は、この先の島尾が果たしたと思われる文学的仕事を惜しむ声をさらに高めることになった。作家に対する情別の情は、やがて文学碑建立という形に実を結び、島尾の三回忌を期しての文学碑建立が具体化した。そして、それにもっともふさわしい場所としてこの地西之浦が選定された。

1903年(明治36)7月、文学碑建立実行委員会が発足、文学碑建立のための諸準備に取り掛った。全国の文学愛好家、郷土出身者、豊洋隊関係者ほかさまざまな人々、そして地元瀬戸内町においては

ほぼ全戸から寄付が寄せられ、この文学碑建立にこぎつけることができた。

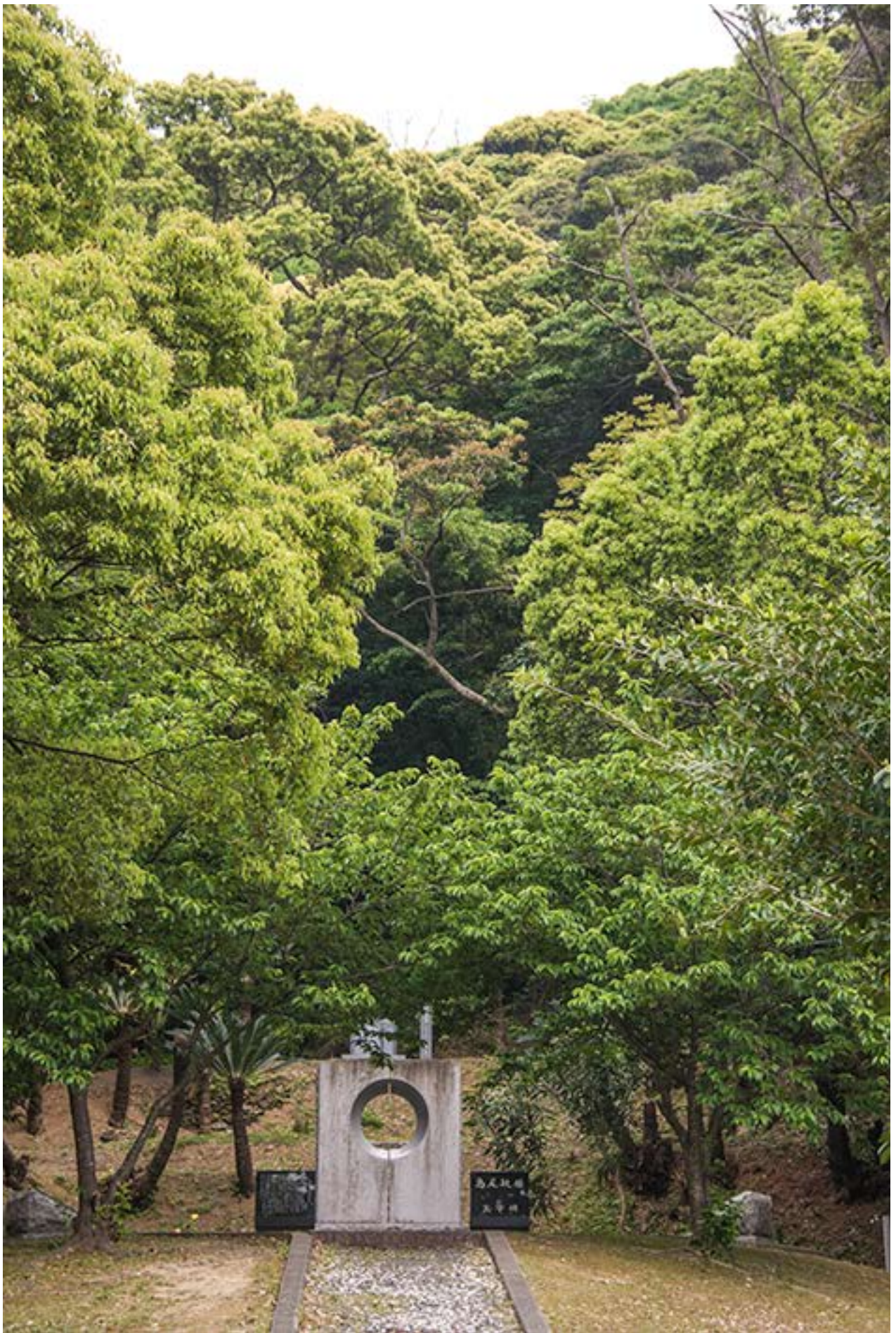
同年12月4日、雲一つない青空の下、三木夫人、第18豊洋隊島尾部隊元隊員をはじめ、多数の関係者を迎えて晴れやかに除幕式を挙行了。

その後、文学碑は瀬戸内町が管理し、町は文学碑記念公園として周辺の環境整備に力を注いだ。

現在町は、文学碑周辺の維持管理とともに、第18豊洋隊島尾部隊基地跡の保存にも力を尽している。

1903年 1月  
島尾敏雄文学碑建立実行委員会













月の光が照り出し、白い細雪が舞い降りた。北の月夜の下、静寂の東  
風が吹く。水が凍り、氷の層が重なった。足音は静かに響き、雪  
も降り、行く自分の旅を告げた。心も静かになった。  
やがて雪が降り、天に昇った。  
た。月も中天に昇った。待つばかりだ。  
もう発進の下々を待つばかりだ。月も中天に昇った。  
不思議に此の世への軌道を喪失してしまつた。  
「出陣書」上





島の山々は、もむらさき色に染まっていた。近頃の  
 かげは、心にも、うしろの松が、子守唄の  
 に、ふもとは、ウシマールが、反対の、  
 方、ふもとは、ウシマールが、反対の、  
 箱庭、ふもとは、ウシマールが、反対の、  
 せ、ふもとは、ウシマールが、反対の、  
 よう、ふもとは、ウシマールが、反対の、  
 お、ふもとは、ウシマールが、反対の、  
 い、ふもとは、ウシマールが、反対の、  
 ン、ふもとは、ウシマールが、反対の、  
 ン、ふもとは、ウシマールが、反対の、

注 ウシマールは、  
 ニシマール、  
 注 ウシマールは、  
 ニシマール、

「はまへのうた」より

















## 震 洋

昭和15年4月、軍司令部から特設機運用として提案された二から九までの特殊兵器のうちの一つ、六の回天とともに実用されたのがこの震洋であった。製製及び木製の試作艇は5月27日に試運転が行われ多少の改良のうえ、遂に量産に移された。一人乗りの一型改一は艇首に炸薬を搭載して全速で敵艦艇に衝突自爆しようとするモーターボートで、量産のため主機関は自動車のエンジンを使った。のち、指揮艇として二人乗りで機銃と観望鏡を積んだものを並行して量産に移した。

15年8月、第一次震洋艇隊司令官が長瀬（横濱隊）での訓練を終わって大塚部隊として父島に出撃した。その後8月以後、九州の川棚警備隊と江田部の江の浦で訓練を行い、北島、南西諸島、本土各地、伊豆諸島、小笠原諸島、支那沿岸、東南アジア（現地製造）等に配備されて実戦に備えたのである。これらの艦隊員は、兵学校や予備学生出身の青年士官が隊長となり、各艇員は予科練出身者であった。



































































































